

---

# チェイ大帝国記

ろーらんだ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チヨイ大帝国記

### 【Zコード】

N7999X

### 【作者名】

るーらんだ

### 【あらすじ】

もしも、この大宇宙に外側があるとしたら。  
そこにもきっと、太陽のような星があつて。  
そこを廻る、恒星が存在していて。  
その中にはきっと、地球のような青い星が一つあつて。  
名前を「アクリエス」とでも言つんぢゃないかな。

これは、地球とはまた別の何処かの星で繰り広げられるとある一国の歴史の物語である。

13人いる兄弟姉妹達の誰が王位を継ぐことが出来るのか？

その為には与えられた小さな国を一番発展させなければならない。  
同盟、裏切り、戦争、貿易、良心、絶望、そして兄弟愛。

そのなかで、成長していく兄弟姉妹達の絆を描く。かもしれない。

## 一章『波紋』・事の発端・（前書き）

凜狼 リーラン SALA サラ 虎翼 クイキ 玉憂美 ユクウ  
ミ 響凜 ハウリン 鈴麗 リンレイ 麗音 レイン 麗龍 レイ  
ロー 小龍 シャオロン 雷擊 ライキヤク 戰銃 センシュ 雀  
燕 サクエ 暁理 キヨウリ 桜 さくら 蘭 ラン 羅羽 ラコ  
三麗龍 サンレイロン 日本虹 ジパング 三麗 サンレイ 鈴音  
龍 リンオンロン

とつあえず、でてくるのはこんなものでしちゃうか。

上記の漢字が出てきたら の右側に表記されてる読み方で読んでください。

ルビふるの忘れました。

## 一章『波紋』・事の発端・

アクリエス星の数ある国の中でも、国土面積第三位の大國、チエイ。この國は一〇〇年ほど前までは、極東の島國と同じくらい小さな國でした。

そんな國がたつた一世紀でここまで大きくなつたのには、チエイ独自の王位継承のルールがあつたからなのです。それは一〇〇年前、アクリエスのほぼ全域で経済状況が悪化した際に当時の王様が十三人いる子供たちに発令した決まりでした。

この十三人の中で一番手柄を立てたもの、つまり、たくさん植民地を、沢山の金を、国民を、食物を得、この國を一番豊かにしたものに、王位を継がせよう。

王様は、小さなチエイをさらに小さく十四個に均等に区切った地図を広げて言葉を続けました。

ここに、チエイを十四個に区切った地図がある。この城のある区域は我が貢おつ。その他の地域は兄弟姉妹で仲睦まじく選びなさい。

王様は穏やかな笑顔でそう告げますと、急に厳しいお顔になられました。

自分の持つた地域の土地や国民、金銭は好きなように使ってよい。新しい法律の発布も許可する。お前たちは時に戦い、時に協力しながら自らの國を豊かにしていくのだ。ただし、自らの國を奪われたものに、行く場所は無い。

王様は厳しいお言葉と地図を残して王室へと向かつてゆきました。さて、王様が完全に見えなくなると、お兄様、お姉様方は早速いい領地を確保しようと言い争いを始めます。

「はあ」

兄弟姉妹の中で一番年下の凜狼様は深い溜め息を吐くと、広い会

議室に響く喧噪に負けないよう声を張り上げました。

「お兄様、お姉様方。私はこの、一番北の山地の地域が良いのですけれど、ほかにこの地域を希望している方はいらっしゃいますか？」大きな机の周りを囲っている兄弟姉妹をかき分けて、地図の上方に白い指をトン、とのせました。周りの反応がないのを確認すると、

「異論はないようですね。では、失礼します」

冷たく言い放つとくると背を向け、私を呼ばれました。

「行きましょう、SALA」

凛狼様の発言によつて静まり返つた会議室に、十歳の少女が立てるには些か大人び過ぎている足音が響きます。カツカツと大理石を叩く音。その音が、大きな金の装飾が施された両開きの扉の前に来たとき、凛狼様の背中に声がかけられました。

「おい。どこに行くんだ、凛狼」

第六王位後継者であつた虎翼様です。

凛狼様は振り返りもせず、皮肉たっぷりの声色で言い返します。  
「決まっていますわ。こつなつた以上、こんなところで低レベルな言い争いをしているよりも、早く現地に赴いてするべきことをした方が有意義ではありませんこと？」

虎翼様は言葉につまりました。しかし、五つも下の妹に言い負かされるなど、虎翼様のプライドが許しません。せめてもの悪足搔きに一言。

「お前こそ、そんなゾンビなんか雇つてる金があんなら、北の大地に城でも建てたらどうだ？」

凛狼様は虎翼様を鋭い目つきで睨めつけ、虎翼様は凛狼様を鼻で嗤いました。

「まあ、二人とも。いいじゃない。私たちはこれからお互に関係なんて無くなるのだから」

会議室に漂つた不穏な空氣を、王女様の第一子である玉憂美様の穏やかな声が破りました。

凛狼様は虎翼様と同時にフイツと背を向けると、金の装飾が施された扉に手をかけました。

「さよなら、皆様」

凛狼様は会議室に響き渡るほどの大きな音で乱暴に扉を閉め、イライラとしたご様子で大理石の床を踏みつけながら歩きます。

「私は気にしておりませんよ。なんと言われようと、私は凛狼様の傭兵であり、側近のメイドですから」

「で、でもお

凛狼様は薄い唇を尖らせます。

凛狼様が気にしておられるのは、先ほどの虎翼様のお言葉の中にあつた「そんなゾンビ」の部分です。「そんなゾンビ」とは、話の流れから察するとおり、私、凛狼様の傭兵兼メイドのSALIAのことでござります。

私は今から丁度三年前、大活躍の末に戦死した女戦士でした。戦死した割には状態の良かつた私の死体は、当時七歳であつた凛狼様に高値で取引され、凛狼様の開発した「スーパー再生薬」の実験の為のモルモットとして使われました。「スーパー再生薬」とは、チエイ古来の変な薬品に様々な化学薬品を混ぜ合わせ、奇跡的に完成した死者を蘇らせる薬なのだそうです。そんなこんなで、蘇った私を凛狼様は雇つてくださいました。戦場にてただひたすらに敵兵を殺すだけだつた殺人兵器の私を、凛狼様が人間らしく扱ってくれるたびに戦場で捨てたはずの私の心が少しづつ、戻つてくるのです。私は、凛狼様が作り上げた凛狼様の『人間』です。私をゾンビと呼ぶことは、凛狼様のプライドが許しません。

「SALIA、部屋に戻つたら早速準備をするから、倉庫から持ち出せるだけの防腐剤を持つてきて。それから、私の辺鄙な土地に小屋と農作業が出来るような服を用意して」

まあ『人間』といえど、自ら意識せずに心臓が動いている訳でもありませんので、防腐剤は必須です。

「わかりました。あの、土地に用意するのは、お城とかじやなくつ

ていいんですか？三日あれば建てられますが

私には、再生されたときに凜狼様が改造を施して若干、全体的な身体能力が上がっていますので、お城を三日で建てることも容易です（しかし、その分頭の方が弱くなりました）。

それなのに、何故お城を建てないのでしょう？

「これはね、私の作戦の準備なの。ここだと聞かれる可能性があるから、また後で話すわ」

凜狼様は幼い顔に不釣り合いなほどどの陰湿な笑みを浮かべました。

## 一章『波紋』 - 凜狼side - (前書き)

凛狼 リーラン SALA サラ 虎翼 クイキ 玉憂美 ユクウ  
ミ 響凜 ハウリン 鈴麗 リンレイ 麗音 レイン 麗龍 レイ  
ロー 小龍 シャオロン 雷擊 ライキヤク 戰銃 センシュ 雀  
燕 サクエ 暁理 キヨウリ 桜 さくら 蘭 ラン 羅羽 ラコ  
三麗龍 サンレイロン 日本虹 ジパング 三麗 サンレイ 鈴音  
龍 リンオンロン

とつあえず、でてくるのはこんなものでしちゃうか。

上記の漢字が出てきたら の右側に表記されてる読み方で読んでください。

ルビふるの忘れました。

## 一章『波紋』 - 凜狼side -

「辺鄙すざわるわ、この土地。だから、この辺鄙を生かすの「  
1DKの狭いダイニングの円卓を、私と凛狼様は地図を広げて囲  
んでいました。

「いい?今回、チエイ全土に発布された『チエイ大帝国拡大プロジェクト(仮)』が施行されるのは明日の午前〇時から。ということは、気の早い奴だと一週間後くらいには内戦を始めるわ。皆、最初は安全に兄弟たちの、特に私たちみたいな年齢層が低めで群れない奴らのところに戦争をふっかけてくるわ」

凛狼様の細く白い指が、地図上を駆け巡ります。

「戦争をふっかけられる確率が高いのは、私と桜、暁理、それと響  
凛ね。たぶん、麗龍・麗音・鈴麗の三人は『完璧な国を作る!』と  
か中一めいたことをほざいて手を組んでるはず。逆に、戦争をふっ  
かける確率が高いのは戦銃、雀燕、虎翼、鈴麗含む三国同盟つてと  
こ。ちなみに、戦争を起こす相手が虎翼か三国同盟の場合、私と響  
凛の狙われる確率が跳ね上がる」

「ここで、私は一つの疑問に気がつきました。

「凛狼様、小龍様や玉憂美様、雷撃様が攻め込まないのは何故ですか?」

私がそう聞くと、凛狼様は呆れたように溜め息を一つ吐きました。  
どうやら、私はまた馬鹿なことを聞いてしまったようです。

「いい、SALIA。おそらく、小龍や玉憂美はチエイ内部で戦争を  
起こす可能性は、今のところまずないわ。彼奴らは年上って言う立  
場を使って、内戦で私たちが疲れた頃に襲つてくるバズよ。雷撃に  
関しては……私にも読めないわ。彼奴はいつも予想の斜め上を行く  
から、厄介よね」

凛狼様は極力手短に説明してくださいました。それから、面倒く  
さそうに椅子の背もたれに寄りかかると。

「まあ、そんなことはこの際どうだつていいのよ。問題は、如何にして私たちが狙われないようにするか」

「その作戦は、もう考えておられるのですよね？」

私が身を乗り出して聞くと、凛狼様はまあねと渾身のドヤ顔になりました。

「さつきも言つたけど、地の利を生かすの。つまりは、貧しいふりをするのよ。わざわざ大きな労力を使って戦争を起こし勝利を収めたって、手に入るのは金も食料も無い廃れた国だけ。あたしだつたら、そんな国と戦つたりはしないわ」

凛狼様は丁寧に地図を折り畳みました。

「だから、城は建てない。きれいな服も着たりしないわ。私も農作業はきちんと手伝うし、あなたもそんな給仕服……」

そこで凛狼様はぴたりと言葉を切りました。

人差し指を自分のあごに当て、時間にして数秒何か真剣に考えると、再び口を開きました。

「……いいわ。給仕服を着なくとも。ただし、最低限のルールは守りなさい」

「はい。ありがとうございます」

何故、私が給仕服を着るか着ないかで凛狼様があのようにな暫し考え事をしたのか、と言いますと、私の『もう一つの設定』が関係してくるのでございます。

私は元々女戦士でしたから、性格も相当荒くなっています。凛狼様の「スーパー再生薬」を投与されゾンビとして蘇ったときも、その性格が変わる訳ではありませんし、凛狼様が加えた改造の効果もありまして、実験室から脱走しようとしたり、お城の扉を破壊したりと、相当な問題を起こしました。そんな私の性格を見かねた凛狼様が、次に私に投与したのは「ある一定の条件を満たしたとき、性格を全く正反対のものにする」いわば人を人為的に二重人格にする薬です。名前は忘れてしましたが。そして、「性格を反転させる条件」として凛狼様から『えられたのが「給仕服を着ている間』

であつたというわけです。さすがに馬鹿は直りませんでしたが。

まあ、何はともあれ明日からは私も給仕服の呪いから解き放たれ、メイドではなく傭兵として雇われることになります。体、訛つてゐかも。準備運動がてら、一暴れしてこよなかしり？

「暴れるのは、勘弁ね」

思った矢先に釘を刺されてしましました。

「今日はもう寝ましょ。明日からは事実上、戦争が始まってしまふのだから。

夜はゆっくりと更けていきます。

まるで、私たちをその闇へ誘つかのようだ。

## 一章『波紋』 - 凜狼side - (前書き)

凛狼 リーラン SALA サラ 虎翼 クイキ 玉憂美 ユクウ  
ミ 響凜 ハウリン 鈴麗 リンレイ 麗音 レイン 麗龍 レイ  
ロー 小龍 シャオロン 雷擊 ライキヤク 戰銃 センシュ 雀  
燕 サクエ 暁理 キヨウリ 桜 さくら 蘭 ラン 羅羽 ラユ  
三麗龍 サンレイロン 日本虹 ジパング 三麗 サンレイ 鈴音  
龍 リンオンロン

とりあえず、でてくるのはこんなものでしちゃうか。

上記の漢字が出てきたら の右側に表記されてる読み方で読んでください。

ルビふるの忘れました。というか、ルビの振り方がいまいち分からないです。

## 一章『波紋』 - 凜狼side -

翌朝。

長い間『給仕服』に縛られていた私の『元の性格』が姿を現す時が来ました。

空に向かつて大きく一つ、伸びをすると、用意しておいた白のYシャツと迷彩色のカーゴパンツに着替え始めます。

もぞもぞと音を立てずに給仕服を脱ぎ捨て、ささりと着替えを済ませる。随分長い間性格を正反対にされていた所為か、若干丸くなつた自分に苦笑する。

「凛狼？」

起きているとは思つてないが、ま、とりあえず声をかけてみる。

そういえば凛狼はいつも十時起きだったな。

「……起きてるわよ」

「つづわあ」

言葉の端に怒氣を孕んだ声が返つてきて、あたしは盛大にベッドの上で飛び跳ねてしまった。ベッドと言つても、城に住んでたときのとは違つてスプリングが無いから、強か尻を打ち付けた。いつてえ。

「あんたが暴れださないよう見張ろうと思つてのことよ。まあでも、そんな馬鹿な考えは無いよう安心したわ」

凛狼は「さてと」と切り替えると、立ち上がった。

「S A L A、とりあえず今から私の全国民を回つて、九時から会見を開くと伝えてちょうだい。その間に私が朝食を作つておくわ」

「…………つくれるのか?」

あたしの一言に、凛狼はむうと口を尖らせて、精一杯の不機嫌かつ怖い顔で睨め上げてきた。寝癖をつけたその顔が面白くて思わず吹き出すると、凛狼はさらに不機嫌度を増して言い返す。

「なめないでよね。今のあんたよりは上手く作れるわよ」

それから、不機嫌かつ怖い顔を維持するのに限界が来たらしく、  
吹き出した凜狼と二人で笑った。

戦争の始まりにしては少々、幸せすぎる朝だった。

## 一章『波紋』・響凜side・(前書き)

凛狼 リーラン SALA サラ 虎翼 クイキ 玉憂美 ユクウ  
ミ 響凜 ハウリン 鈴麗 リンレイ 麗音 レイン 麗龍 レイ  
ロー 小龍 シャオロン 雷擊 ライキヤク 戰銃 センシュ 雀  
燕 サクエ 暁理 キヨウリ 桜 さくら 蘭 ラン 羅羽 ラユ  
三麗龍 サンレイロン 日本虹 ジパング 三麗 サンレイ 鈴音  
龍 リンオンロン

といつあえず、でてくるのはこんなものでしちゃうか。

上記の漢字が出てきたら の右側に表記されてる読み方で読んでください。

ルビのふりかたわからないです。

## 一章『波紋』 - 韶凜side -

「韶凜様？」

私は給仕服の長い裾を持ち上げながら、城を出て行く韶凜の背を小走りに追いかけた。

韶凜は長い髪を揺らしながら振り返ると、小さくあつと声を上げた。

「蘭……。ついてくれるの？」

「ええ、勿論です。私は韶凜様に仕えると決めたのですから」

私は笑顔で答えを返す。

「本当に？」

嘘に決まっている。でなければ誰がこんな、武術ダメ勉強ダメ経済力無しで国民の支持皆無のろくでもない奴に付いていくかつーの。

本当は、王の座を乗っ取って、国を継ぐ為でーす。

なんて腹の内は一切見せずに、私は先程よりも優しい笑顔を作つて頷く。

「ありがとう」

ただちょっとだけ、コイツの笑顔を見ると、本当にひょっとだけ罪悪感が湧いてくる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7999x/>

---

チェイ大帝国記

2011年11月27日17時56分発行